新西遊記・下

陳舜臣

タシケント
トクマク
天山
サマルカンド
阿克蘇
庫車
トルファン
敦煌
玉門関
酒泉
武威
蘭州
西安(長安)
バルフ
クンドゥズ
バーミーン
ベグラーム

新西遊記・下

陳舜臣

読売新聞社

新西遊記（しんさいゆうき）・下
昭和55年11月27日　新装第一刷

著者　陳舜臣（ちんしゅんしん）
編集人　守屋健郎
発行人　大原規男
発行所　読売新聞社
〒一〇〇　東京都千代田区大手町一の七の一
〒五三〇　大阪市北区野崎町八の一〇
〒八〇二　北九州市小倉北区明和町一の一一
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社堅省堂
定価九五〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

© 1975 CHIN SHUN SHIN

0093—702990—8715

*目　次

西に火あり……5
積雲山めざして……14
胡旋舞の足……22
羅刹女のお化粧……30
久闊と万福……39
追いつ追われつ……47
血闘翠雲山……55
完全包囲……63
八卦山に雨ぞ降る……71
文明よ、驕るなかれ……78
火の国へ……86
子母河の水……94

落胎泉争奪……102
女だけの国……111
縁談急進行……119
黄道吉日……127
植物性妖怪……135
お萬の方……144
屈支の国へ……151
竜池城悲話……159
苦難の雪山を越えて……166
妖しのおんな……174
道草……182
大雪山へ……191
オール・フィクション讃……198
万水千山を越えて……206

装丁＊熊谷博人

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

新西遊記・下

亡き母に捧ぐ

西に火あり

「宇宙の外まで吹っとんで行け！」
羅刹女は力まかせに芭蕉扇であおいだ。ひとあおぎ八万四千里である。
羅刹女は三回あおいだ。ところが、悟空はびくともしない。
霊吉菩薩からもらった定風丹を、襟に縫いこんでいたからである。
すさまじい勢の風が、悟空のからだに吹きつけたが、彼はうごかない。
おかしなもので、風をかんじると、定風丹のおかげでからだはうごかなくても、心がうごいてしまった。
――羅刹女恋し。
と想っていたその心が、彼のからだのかわりに、どこかへ吹っとばされたのである。
人間なら余韻というものがある。恋心がいっぺんに、てのひらを返すように、消えてしまうことはないだろう。
やはり、サルはサルでありました。恋慕の心の余韻など、きれいさっぱりありません。
「しゃらくせえ、女め！」

と口汚く罵った。
羅刹女もあわてた。芭蕉扇でうごかないやつなど、いまだかつていなかったのである。ともかく、芭蕉扇を抱いて、芭蕉洞に逃げ込み、ぴたりと戸を閉めた。
洞門の扉は、押せども引けども、びくともしない。悟空はしばらくその扉をにらんだ。ぴったりと閉められているようだが、肉眼で見えるか見えないかの、僅かのすきまはありました。
「よし、これは入ることができそうだ」
悟空は襟に縫い込んだ定風丹をとり出し、口のなかに抛り込み、えいっ、と変身の術を使った。
なにに化けたのか？　蟭蟟虫であります。
この虫、学名をなんと申すか、不明ですが、これまでの西遊記の訳者は、苦しまぎれに『うんか』と訳していますが、そんなにでかい虫ではありません。
なにしろ蚊の眉のなかに巣をつくるというのだから、その小さなこと、ほとんど想像を絶する。そのくせ、蚊の眉にかけた巣のなかから、大空を翔ける大鵬を見てケラケラとうち笑い、
——バカは図体がでかいわい。
と悪態をつくそうだ。
こんな虫に化けたのだから、扉の僅かのすきまからでも、悠々と入って行ける。
洞のなかでは、羅刹女がしきりに首をかしげていた。
「あのくそ猿め、どうして芭蕉扇で飛ばないのだろう？　ああ、いまいましい。喉がかわいちゃった。……お茶をちょうだい」
「はーい」
催促された女中は、あわてて茶壷をささげ、かおり高いお茶を湯呑みについで、女あるじに差し

出した。
玄奘がインドへ取経に出かけたのは、七世紀の前半であるが、『茶』という字が生まれたのもそのころなのだ。それより何百年も前の魏晋六朝時代の清談の徒も、さかんに茶を飲んでいたが、おもに『茗』という字を用いていた。
唐代の茶は、臼で碾磨して、団子状にこね、それにショウガなどを混ぜ、熱湯をそそいだようである。だから、現在の日本の抹茶のようなものであったろう。
湯呑みのなかの、緑色のどろりとした液体には、泡が立っている。変身した悟空は、その泡のうえにとまった。
蚊の眉に巣くうという、顕微鏡なしでは見えぬ微生物なので、むろん羅刹女も女中も気がつかない。
羅刹女はそのお茶を、ぐいと飲んでしまったのである。
悟空はお茶とともに、羅刹女のお腹のなかにはいり、大声で叫んだ。
「嫂さん、芭蕉扇を貸しておくれ！」
羅刹女はびっくりして、
「やや、くそ猿の声がする。どこにかくれておるか？」
と、部屋のなかをあらためた。鏡台のひき出しまでしらべたが、悟空のすがたは見あたらない。
また声がした。――
「嫂さん、おねがい！」
「うぬ、その声はどこからきこえるのか？」
羅刹女はキョロキョロした。女中が、
「どうも、あなたさまのなかから、声がするようでございます」

と、眉をしかめて答えた。
「まさか……」羅刹女は天井を見上げたり、床を見下ろしたりして、「悟空よ、おまえはどこで術をつかっているんだね？」
「あっしは、嫂さんのお腹のなかで、ちょいとひと休みしているのさ。ああ、肝臓も肺臓も見物しましたよ。嫂さんのお腹、ひからびてるようだから、お茶を進上しますかな」
悟空はそう言って、羅刹女の腹中で足ぶみをした。
「あ、いたた……いたた」
悟空はむろん、もう微生物はやめて、適当なサイズの猿の形になっている。それが足ぶみするのだから、痛いのなんのって、羅刹女はしきりに悲鳴をあげた。
「ほほう、ひからびたはらわたが、ちょっと湿ってきましたね。……ええっと、ここはどこかな？ピンク色の門があって、額がかかっておりますな。なんと書いてある？　ほう、宮殿らしうございますな。……子宮……なるほど、子供の宮ですか」
悟空は羅刹女の体内をぶらぶら散歩している。
「そこへ入っちゃダメ！」
と、羅刹女は金切声をあげます。女性の大切な器官に、土足で踏みこまれてはかないません。
「では、まわれ右！」
と、からだをひねったついでに、左右のやわらかい肉の壁を、どんどんとなぐりつける。
「いたた……いたた」
「いまのは、ちょっとしたおやつ。こんどは、こってりしたお食事を差し上げましょう」
そう言って、悟空は頭突き、キックと、あばれまわった。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

「嫂さん、まだ足りませんかね？　もっとご馳走をしましょうか？」
悟空は腹のなかで、とんぼ返りをした。
「ゆるして、ゆるして！　孫叔父さま、ゆるしてちょうだい！」
羅刹女、たまらず命乞いをする。
「ほう、あっしも、くそ猿から、叔父さまに昇格したか。……ともかく、牛魔王兄貴とは義兄弟、兄貴に免じて命ばかりは助けてやるが、そのかわり、芭蕉扇を持ってくるんだね」
「はい、はい、どうか外に出て、持って行ってください」
「とにかく、このそばに持ってこい。そいつをたしかめてから出てやるよ」
羅刹女は女中に芭蕉扇を持って来させた。
悟空は喉のところまで出て、芭蕉扇をたしかめてから、
「よし、いまから出てやる。命を助けると言った以上、どてっ腹に風穴をあけてとび出すわけにもいかないね。ちゃんと道を通って出ましょう。上から出ようか、それとも下からにしょうかな？」
「上からにしてください」
羅刹女はあわてて言った。彼女にだって羞恥心はあります。
「じゃ、嫂さん、口を三べん、ぱくぱくしてくんな」
「あいよ」

悟空は羅刹女の口からとび出し、芭蕉扇をさらって、意気揚々とひきあげた。
三蔵一行も悟空の帰りを待ちわびていた。
一ばん先にみつけたのは八戒で、

「お師匠さん、兄貴が帰ってきましたよ。……兄貴が、……あっ、大きな団扇をかついでいますよ。芭蕉扇奪取作戦、成功です！」
と、子供のようにはしゃいだ。
「成功であろうと失敗であろうと、兄貴が帰って来さえすればよいのです」
沙悟浄は顎に手をあてて言った。
豚は極端な躁で、河童は鬱だったのです。
「兄貴がうれしそうに、団扇をかついでやって来るのに、失敗であるとは、なにごとであるか、やい河童！」
八戒は腹に据えかねて、そう詰め寄った。
「成功であるか失敗であるか、むこうから来る兄貴の顔を見ただけではわからないじゃないですか。そもそも宇宙の体系は……」
河童の沙悟浄は、突如として、論旨を飛躍させた。現実について論じるのは、この河童よりほどにが手とみえる。
「成功はすなわち、失敗。失敗はすなわち、成功でありまするぞ」
沙悟浄は難しいことを言った。
哲学的には晦渋ではあるが、要するに、成功したって、失敗したって、どうでもよいということなのだ。
「もうすこし、わかりやすく言ってくれんか？」
と、八戒は言った。
「これ以上、わかりやすく言えねえよ」

「それでも、こちらはわからん。成功すなわち失敗なんじゃな？」
「そのとおり」
「では、兄貴は成功したかのように、にこにこして帰ってくるが、あれはつまり、失敗であるか？」
「しかり！　失敗であるぞ」
「どうもよくわからねえな」
論旨がすこしでも曲がると、八戒の頭脳の回路は、それをうけつけない。
「あなたのアタマでは、ちと無理ですなぁ」
河童はずけずけとそう言った。
「可哀そうに、それでは、兄貴は失敗しておるのに、あんなにうれしそうにしておるのかね？」
「ご明答。わしの見るところでは、悟空の兄貴は、とんでもない失敗をしたようじゃ」
沙悟浄はそう言ったが、戻ってきた悟空の話をきくと、これ以上の成功はないといえるほどの成功であった。
「河童よ、おめえも、ヤキがまわったんじゃねぇかな」
八戒は皮肉たっぷりに言った。
「そうかも知んねえ……」
悟浄は、いかにも哲学的な返事をした。
悟空は帰ってくるなり、唾をとばして手柄話をはじめたのである。
ともかく、芭蕉扇はこちらの手中にある。
三蔵法師一行は、すぐに西のかた火焔山にむけて出発した。
だんだん暑くなったのはとうぜんであろう。

水中生活の長かった沙悟浄の足は、地熱にたいする抵抗が最も弱い。
「足の裏が熔けそうだ」
と、顔をしかめた。
「爪が焼ける！」
と、八戒も弱音を吐く。
「よし、よし、待ってろ。いまにらくにさせてやるからな。楽は苦の種、苦は楽の種というからな」
悟空、そんなわけのわからない語呂あわせをしながら、芭蕉扇をとりあげ、前に出て、
「ええいっ！」
と、大きくあおいだ。
ところが、どうしたことか、焔は消えるどころか、小さくなるどころか、かえって、ごおーっと、唸りをあげて噴きあげてきた。
悟空はあわてて、またあおいだ。
すると、焔は一そう大きくなり、三回目には焔のあたまは千丈に達し、それが、ぶわーっと、悟空めがけて襲いかかります。
不死身を誇る悟空だが、精神を緊張させているから、雷も火も彼を傷つけることができない。このたびは、火は消えるものと油断していたので、からだの毛を焼かれてしまった。
「退却、退却！」
悟空は一行をひきつれて、もと来た道をまっしぐらにひき返した。
「どうして、火が消えねぇんで？」
と、八戒が訊く。

「にせものの芭蕉扇をつかまされたらしい」
と、悟空。
「成功すなわち失敗。……」
沙悟浄はひとりでうなずく。
「こんなに暑くちゃ、からだが焼けちまう。火のないところから行きましょうや」
と、八戒は言った。
「で、その火のないところは？」
と、三蔵はきき返した。
「東も南も北も、火はありませんよ」
「お経があるのはどちらだね？」
「西です」
「私はその西へ行く」
三蔵の決意はかたい。
「お経のあるところに火あり、火のないところにはお経なし……これ、世界のパラドックスにほかならない」
沙悟浄は、哲学用語の選択にいそがしい。
そこへ一人の老人がやって来た。
「わしはこの火焔山の土地神でして……」
と自ら名乗った。
神々の世界でも、中央集権がはなはだしく、ローカル神はたいそう冷遇され、地位もいたって低い。

孫悟空なども、なにか気に入らぬことがあれば、土地神を呼び出し、頬っぺたをひっぱたいたり、リンチを加えたものである。

「いったい、この火はなんだ？　誰がこんな火をつけやがった。牛魔王の兄貴かい？」

と、悟空は土地神に食ってかかった。

「正直に申し上げますが、お怒りにならんでください」

「怒るものか。おいら、正直は大好きだ」

「この火をつけたのは、誰あろう、あなたさま、すなわち斉天大聖孫悟空……」

積雲山めざして

「ばかな！　おれが火をつけた？　冗談じゃねぇ。けちな放火魔とはわけがちがうぞ！」

約束に反して、悟空は大いに立腹した。

「ま、いきさつをご説明申し上げれば、ご納得いただけるとは存じますが……」

と、土地神はもみ手をした。

土地神と、かりに『神』の字をつけたが、中国の民間では、ふつう『土地公』と呼ぶことのほうが多い。西遊記の原文では、ただ『土地』となっているだけである。

うぶすな神とはいえ、神様らしい扱いはうけていないようで、サルごときにもみ手をしています。

古代日本の神には、天つ神と国つ神とがあったが、天降った天つ神のほうが格が上とされていた。国つ神は征服されたり帰順した土地の神であろうという。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com